

ニセコイを見守るもの

TL警備員

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはニセコイを送る主人公の物語でも、それに振り回されるヒロインでも、ましてや親友の物語でもない。

それを見守る者達の物語だ。

目次

ソウグウ	シレン①	セツメイ	テンニン
33	22	13	1

テンニン

とても懐かしい夢を見た。

「

酷く懐かしい夢だ。

「Be happy…（幸せになって…）」

そう言つて、自分より大切な少女を捨てた夢。そして…

「おめえは今日から俺の息子だ。」

仕えるべき親が出来て、家族が出来て、大切な守るべき存在が出来た夢。

「愛、今日からこいつがおめえの主人だ。名前は——楽。一条楽。おめえが生涯守り抜かなきゃいけねえ、俺の息子で、おめえの弟だよ。」

これは、ニセコイを送る主人公の話じゃない。これはその傍に仕える本来なら存在するはずのない、義兄の話。それ以外の話だ。

朝はまだ日が昇り始めたところ。自分は今日も坊ちゃんよりも早く起床する。他の家族達はまだ夢の中、そんな時だと言うのに誰よりも早く行動を開始し、いつの間にか数時間。

「おーい！飯できたぞおー！てめえらあ〜」

『おはようござえやす、坊ちゃん!!!』

集英組。この地域では名の知れた組。実はそれなりに力の強い組である。そんな組の朝は早い。決まった時間に起きては決まった時間に皆で食事をとり、決まった時間に

皆活動を開始する。

「おはようございませう坊ちゃん。」

「おはよう。愛兄。」

一条愛。坊ちゃんの御身をお守りするために誰よりも早起きをして鍛錬にはげでいる。集英組一、坊ちゃんへの愛が強い男。

「今朝もまた朝食の支度ありがとうございやす。手伝いやす。」

「おお、いつも悪いな。」

「いえ、坊ちゃんこそ…」

集英組の朝食は何かと騒ごうしい。理由は坊ちゃんの飯である。坊ちゃんが飯を作るまで、俺たち集英組はまともなものを口にしていなかった。やきすぎたパン、病院食を連想させるほどのお粥、極めつけは朝からガツツリステーク。正直、拷問かと思わせるものが多かったらしい。自分からしたら全てがご馳走だが…

そんな所に自分たちの父親が登場する。

「やれやれ、毎日忙しねえなテメエら…」

「親父。」

『組長、おはようござえやす!』

「おはようござえやす。親父。」

「おう。」

現れたのは自分を拾った。命の恩人であるお方。自分の親父だ。その姿は年老いたとはいえ今日も凛々しく神々しい。

「そういうや、楽。近々テメエにでえじな話があるから覚えとけ。」

「大事な、話?」

「それと、竜、愛。ちと飯の後に俺んどこに来い。」

『へい。』

坊ちゃんを他の組員に任せ、安全に送り届け、皿洗いを済ませた後。俺と竜さんは親父の部屋へと赴いた。

「組長、失礼しやす。」

「おう。」

「…親父、大事な話つてのは一体?」

襖を開け、頭を下げながら部屋へとはいる。そこには煙管を啜えながら、煙を吐き出す親父の姿があった。

「来たな、早速だが。最近、ギャング共の動きが活発になってんのは知ってるな?」

「…へい。」

「お恥ずかしい限りです。自分の力不足で組長の顔に泥塗るなんざ…」

「竜、テメエの落ち度じゃねえ…面あ上げろ。問題はそこじゃねえ…近々、ギャングのボスと会談がある。そこまで問題は慎んで欲しいつつう情けねえ頼みだ。」

「!組長は悪くねえです!ですが…」

「親父、いいんですか?そんなんじやギャングにもおでこ(警察)にも舐められたままですぜ?許可さえ降りれば、自分がケジメ付けてきます」

親父の部屋に入り、会話はそれなりに進む。なんでもこれは大事になりそうな気配

だ。正直、最近でてきたギャング達には自分も痺れをきらしそうな頃合いだ。

「愛、血の気の多いことは必ずしも俺たちにはいいって事はねえ。ちつとばかり気いつける。なあに安心しろ、穩便に済ませる。」

「…会談の際、護衛は？」

「必要ねえ。男同志、腹割つてのもんだ。」

「へい…」

「つーわけだ。竜、愛。組のことは一旦任せる。会談は1週間後。その間、頼んだぜ。」

『へい。』

そんなこんなで自分と竜さんは少しの間、組を預かることになった。そして、坊ちやんにもまたほんのわずかな変化が生じ始めた。

「ただいまあゝ…」

「!坊ちゃんっ!どうしたんですかい?!ここ最近、酷いですよ?」

「ああ…愛兄。怪我の事は気にしないでくれ…」

「ですが…」

「それ、よりも…ペンダン、ト…」

あれから数日が経過したある日、坊ちゃんが急にボロボロになり始めて、ついに等々玄関でそのまま睡眠を開始した。ただ寝ていただけだったというのに、気が動転しすぎて、自分は慌てふためいた。

「坊ちゃん…?…竜さーん!?皆あ?!坊ちゃんが…!坊ちゃんが死んだあ?!」

「なんやおお?!?!」

『2代目えええつ?!』

そうして、波乱万丈な数日が過ぎ去った時間問題は起きた。

「愛…気い、つけ、ろ…」

「…ギヤングの親玉か？」

「ふん、ボスが貴様らのような猿共に直接お会いするはずがないだろう。弁えろ」

「身の程は知っているつもりだ。だが、兄貴分をこんなにも、しかもたった一人にやられておめおめと帰る訳にもいかねーよ。名前は？」

「…極東の猿が…口の利き方に気をつけろ。」

「テメエこそ、日本のヤクザ舐めてんじゃねえよ…」

「—」

観戦者は居ない。そこには白髪メガネをかけたエリート様と、泥臭く穢れ多い、ヤクザが拳をぶつけ合っていた。

「っ?!」

「っ!」

「Surprised (驚いた) 顔を殴られたのは久しぶりだ…」 (先程の猿共とは違う

らしい。これならば本気で殺り合っても良からう。」

「そいつあよかったなあ…」（ふぎけるな…一撃で肋が三本はいったぞ。こいつは確実に殺しを知ってやがる。）

そこで俺は自覚した。この男は生半可な覚悟で打倒出来るものではない。

「なかなか骨があるな、試させてもらおうか」

「光栄なこつた…」

「ー」

「ちい、ポリスカ…!」

「はあ…」

「今回は見逃してやる。だが、次合間見えた時はその命を頂くぞ。」

再び、2人が拳を交えようとした時。パトカーのサイレンが轟いた。それに反応し、ギャングの白髪は退散し、自分は九死に一生を得た。

「…たく、三丁目からの通報があったかと思えば…まあたお前か愛。」

「——右助さん。」

「はあ…まさかとは思ったがこの痕跡的に大方ギャングとでもドンパチしたか？」

「すいやせん…」

「ヤクザもんが俺に頭下げてんじゃねーよ。仮にも一条の《狂犬》だろうが」

「すいやせん…」

「だから…！はあ、もういい。ここは俺とお前の間つてことで不問にしてやる。次からは気をつけろよ…」

橘グループ直属の機動隊長が俺のような人間と接点があるのは正直良くないが、彼自身が何かにつけて接点を付けようとしてくるのだ。

「へい…ありがとうございやす。」

「たく…背中の墨さえなきやあなあ…」

「？」

最後の言葉は聞こえることなく宙へと消えた。そして、ここから事態は急速に変化していく。

「あー、先週転校生が来て野郎どもが浮かれたばかりだが、今度は私ら女の出番だア！」

何やら教室がざわめき出している今日この頃、ギャングとの接触もあり、重大発表もあり、坊ちゃんにも相談を乗ったこの数日。自分は再び人生の岐路へと立っていた。

「紹介するぜ！今年1年間お前達の副担をすることになった——一条愛先生だあ——」
「!!!」

「…一条愛です。皆さん、1年間ですが、よろしくお願いします。」

「なっ?!」

「なっ?!」

「愛(さん) 兄?!」

偽物の恋は急激に加速する。

セツメイ

名前 一条愛

身長 179 cm

体重 69 kg

血液型 ??

年齢 23歳

誕生日 3月1日

刺青 彼岸花（赤白） 範囲は背中から二の腕まで

十年ほど前、ゴミ溜めのような場所で自分よりも幼い少女と二人で生きていた。だが、そんな暮らしも長くは続かず盗みを失敗し、仕方なく少女をその地域を仕切っていたギャングの元へと置き去りにする。その後は、アメリカへ私用で赴いていた一条一征（楽の父親）に路地の隅で倒れているところを拾われた。日本へと渡り養子となり、楽を守ることを誓い義兄として生きた。しかし、ある事件をきっかけに義兄としてだけでは

なく集英組の一人としても楽を守るために刺青を完成させる。基本的に親父である一征に忠実で兄貴分たちのことも心から慕っている。そのため楽と同等レベルで可愛がられている。口調は兄貴分達のものが入った（余談だが英語も話せる）。実力は組で2番でクロード≡竜≡右助≡愛こんな感じ。過去に右助とは殺り合った仲で互いに認めあっている。学校では髪を下ろして眼鏡をかけているが、ヤクザとしての仕事の都合、下ろしている髪を頭の上で結っている。

ここからは愛の残念なポイント、料理の腕が小野寺小咲と同等かそれ以上。目付きが鋭く、額の楽と逆の位置に傷が入っているプラス目付きが鋭いため基本怖がられる。そのため学校では髪下ろしの眼鏡。楽への愛情が強すぎて楽の中学時代にクロードと同じ失態をし1週間口を聞いてもらえず死にかける。その他にも様々だが、後々追加していきます。

※随時追加

次から本編です。

「また会ったなボス猿…」

「また会いやしたねクソメガネ…」

「へっ？」

愛の唐突な転任から遡ること数日。現在、集英組の大広間はギャングの大幹部達とヤクザの頭達の睨み合いが開始されていた。先陣を切つてガンを飛ばす竜、それよりも先に珍しく一歩前に出て、クロードを睨めつける愛。負けじと挑発しつつこれまた前へと出てくるクロード。そして、素つ頓狂な声を出す楽と千棘。また、にこやかな笑みを浮かべる両方の頭。

「おい愛。因縁あるんか知らんがおめえさんじゃ手に余る。退けえ」

「竜さん、こいつあは自分のです。自分のケツくらい自分で拭きやす。」

「凶に乗るな猿共。貴様ら如き私ひとりでミンチにしてくれる。」

「でけえ口叩くからには相当な自信があるようやのう…ビーハイブの大幹部さんよう」

「ちよっ！ちよっと待つてえ?!」

「おいおい、誤解してるじゃねーか若えの」

互いに一步も引かず、それどころか額をぶつけ合いながら睨むクロードと愛、そして愛の肩に手を置きクロードを更に睨めつける竜。その様子にたえ切れなくなつた2人が口を揃えて間入り、一旦距離を話したところで親父たちがようやく口を開いた。

「なっ?!ぼ、ボス?!何故ここに…?」

「嬢ちゃんを攫つたなんざとんでもねえ誤解だぜ?」

「なんだつて」

「こいつら」

「ラブラブの恋人同士だからね!」

「…」愛

「…」竜

「…」クロード

「へっ?」楽&千棘

『なあああにいいいっ?!』一同

その日ギャング共が打ち込んだバズーカよりも集英組の組員たちが叫び続けている日時よりもいついかなる時よりも大きな音という声が鳴り響いた。もちろん、当事者である偽の恋人同士からも。1つの疑念を抱えた二人の男がいるとも知らず。周りの者達は泣き叫んだりその場に崩れ落ちたという。ちなみにその後にはちよつとしたドンパチがあつたのは言うまでもない。

（坊ちゃんのあの反応…確実に裏がある。それに、あの化け物も勘が鋭えみてえだ…）
「ん？」

親父たちからの唐突な二人の交際発表から1時間ほど経過した現在。愛は屋敷の縁側でタバコを吸うべく歩いてた。その道中はやはり坊ちゃんの事が頭に浮かんでしまふ。それ程までに先程の事実が信じられずにいた。愛自信へピースモーカーと言われることは無いにというのにこの1時間の間に人はこの半分は無くなっている。そん

なにも落ち着きが無い愛だったが、ここであの二人を発見する。

(ありやあ坊ちゃんどビーハイブの…)

「とにかく！早くこの状況を何とかしねーと！たとえ偽物だとしても、お前と恋人同士なんて耐えらんねえ！」

「はあ?!こつちのセリフよアホもやし！」

「ああ?!んだとこのゴリラおん…な…」

「?なんですつて!つてどうかしたの?……あ」

「…どういふことですかい?お二人さん」

たまたまうちよろしいただけだと言うのにまさかまさかの疑いを証拠づける発言を聞いてしまった。それどころかこの二人の今のところの間柄まで覗き見てしまったのだ。少々心が痛むがそれよりも事実が知りたくなつた。

「あ、愛兄い…今の聞いてた?」

「偽物の恋人、ですかい?坊ちゃん」

(思いつきり聞かれてた〜!!!)

《どうすんのよアホもやし!》目での会話

《ああ?! どうするもこうするもこうなったら隠せねーだろ!》

《じゃあ、ばらすつていうの?!》

《それしかねーだろ! ここからじゃ弁解の余地はねーんだからな!》

「坊ちゃん、それにビーハイブのお嬢様。目での会話は終わりですかい?」

「うっ…」

「命を変えて約束しやす。他言はしやせん…正直に説明してくださいえ」

そこから様々な事を聞いた。集英組とビーハイブの抗争の劣悪化。それによる周囲への被害。それを抑えるための最後の手段。それが2人が付き合うことらしい。2人は正座をしたまま嘘をつくことも無く、全てを愛へと打ち明けた。

「なるほど…それで恋人のフリですかい…」

「そうなんだよ…」

「ホント迷惑しちゃうわ」

「はあ?! こっちのセリフだゴリラ女!」

「ああん?! もつかい言ってみなさいクソもやし!」

「お二人共……」

「……」

「敷地内にはまだ組員含め構成員がいやす。くれぐれも発言には気をつけてくださいませ……」

元々馬が合わないのかあの時の芝居が嘘のように互いに暴言を吐き合う2人。一見仲が悪そうに見えるかもしれないがこれだけ本音を言い合えるというのは中々に凄いと思う。だが、関心もしてはいられない。愛は人知れず決断する。

「だって……」

「分かりやした……自分がお二人の3年間を責任をもってお守りしやす」

「はあ?! 守るってどうするつもりだよ愛兄。」

「そうよ! それに、少なからずクロードが見張りにつくわ!」

「安心してくださいませ。見張りよりも、より身近な場所で支えやす。」

「?」

こうして、長い長い夜は老けて行つた。2人が各自寝室やら家やらに戻つた頃、愛も

また発言を行動に移していた。携帯を片手にある伝手へと連絡を入れる。

「愛だ。教員免許、とってたよな？ ああ、場所は凡矢理高校だ。」

こうして、休日にお二人のデートがあつたことも知らずに愛は一人、準備のため寝る間も惜しんで勉強し続け、3日もただず全教科の高校の範囲を頭に叩き入れたという。

「こんな感じで自分は今、教師としてここに居るんです。」

「そうじゃなくて……」

「教員免許をとるために！」 楽

「どんな方法を使ったのかを！」 千棘

「教えるって言うてんだよ！」 「教えなさいって言うてんのよ！」

波乱万丈なニセコイ物語はまだ始まったばかり

シレン①

「親父、ご報告が。」

「おう、何だ？」

現在教師になって1週間目。何とか、仕事の方は両立できてはいるものの楽と千棘の監視をしつつ、というの骨が織れる。しかし、弱音など吐いてはられない。それもそのはず、愛にとって気がかりになる問題がつい先日耳に入ったのだ。

その報告をするべく、二人の関係を知ってしまった愛は親父の元へと馳せ参じ、膝を着きながら報告をしている。

「先日のデートの際、絡んできた輩はギャング共に連れていかれやした。その後も、坊ちゃんの学校生活、その上での二人の関係はそれなりに順調かと…ですが、問題が一つ。」

「問題？」

「へい…実は女子生徒一名に情報が露呈した可能性がありやす。」

「名前は？」

「小野寺、小咲。」

「小野寺……ふっ、愛そいつなら問題ねーさ」

「！ですが……！」

「安心しろ。おめえさんの心配するような事は起きねーよ。」

「親父が…そういうのでしたら…」

「それより、おめーさんはどうなんだ？」

「自分、ですか……？……その……」

うまい具合に自分の不安材料を一蹴りにし、話題を変えられた愛。そう、親父に相談しなければいけないほどの重要な案件が一つ、愛にはあったのだ。

（今日は残業確定日……！坊ちゃんが早急に家に帰宅した上で竜さん達に頼めばいいもの

の……自分は……！)

そう、今日はツケが回り回って早速残業の日である。それも、苦手だという軟弱な理由で後回しにしていた……——機械（パソコン）作業である。

「……せー……せん……い……せんせー！」

「……終わりの鐘か……今日はここまでです。」

今日休みの先生の代行で愛は数学の授業を担当していた。元々は英語が専門なのか、古文以外のものなら大抵は担当出来るほどの頭の持ち主である。そんな男があるひとつの悩みで50分間の授業を棒に降っていた。

「では、宿題としてプリント3枚を配布するように言われています。明日必ず提出するように。以上。」

1時間にも満たない時間、授業を受けていただけだと言うのにやれ疲れただの、腹減ったーだのという声が聞こえる。しかし、それが6回、7回続けば無理もない。学生

という物の辛さを知りながら教室をあとにしようとした時、追い打ちをかけるかのよう
に事件は起きた。

「愛に……い、一条先生！」

「坊ちやつ……どうしましたか？ 一条くん」

「その……今日、桐崎含め友達は何人か家に来るから」

「……了解しやした……兄貴達には自分から……」

「ああ、頼んだ」

「へい……」

（エラいことになったな……）

営業スマイルもほどほどに、愛は一気に真顔になった。楽との耳打ちにも似た会話を
し終えると、なんとなんと我が家、『集英組』にご友人を招くらしい。それも複数人だ。
舞子殿ならば幼き頃から知ってはいるが、その他複数人、それもビーハイブの千棘お嬢
様までいるとなると、自分が組にいないとはいけない。しかし！

（すいやせん、坊ちゃん！）

「えーそれでは、職員会議を始めます。」

（自分は今日…何もしてあげられやせん！）

「………」

「………」

「………」

「報……ん、っん！私からですが………」

会議開始から30分。ようやくそれは終わりを迎えつつあった。ついつい親父とのやり取りが頭から抜けず何度もやらかしてしまいそうになったもののか難を逃れ残すは残業のみとなった愛。しかし、それが何よりも問題であった。

（大丈夫…パソコンの扱いなら一通り目を通した…いける！）

「!!」

（Excel…だと?!）

愛はデータの監視をする片手間にある参考文献を読み漁っていた。それは、『初心者でも簡単！一日でパソコンマスター！』という本だった。そう、なにを隠そう愛は…

(PowerPointでも…wordでもない…よりによって…Excel?!)

愛の残念ポイント①

——機械音痴

愛は集英組に入り、名を授かってからこの数年。テレビのリモコンぐらいしか操作をしたことがない。何なら、坊ちゃんに頼まれた予約録画さえ成功した事が7回中1回という奇跡の男だ。そんな奴が必死に週末貴重な時間を使いながらパソコンの勉強をしたのだ。しかし、そんな努力も報われず大きな壁が立ち塞がる。

(墓穴を掘ったか…！そろばんで事足りると思っていた自分が情けない…！まさか、こんな機能を使うことになるとは…！)

「……………」

「……………」

(どうする…!?他の教師に聞くか?!いや、こんな事も出来ずに教師になったと知れば悪評が付く…そんなこと…坊ちゃんの顔に泥を塗るのと同じ!ならどうする!)

「愛先生？」

「?!?!」

「良かったら…教えましょうか…?」

（……女神というのは…存在したのか?!）

「お願いしやすー!」

つつい、本職の言葉が出たが…今はどうでもいい!愛は一刻も早く、この仕事を終わらせることに頭を集中させていた。担任であり、自分の上司に当たるキョーコ先生に感謝しながら愛はすぐさまキーボードに向き直る。

「を、を、を…w o、だったな…」

（タイピングおせー!!）

キョーコ先生にそんなことを思われていたとは梅雨知らず、愛は必死に2時間ほどかけて仕事をクリアするのであった。

「ちい…時間をかけちゃった。最短ルートは…屋根の上!」

我が家を目指し愛はスーツ姿で校門から全力疾走し、集英組を目指した。その姿をしつかりと目にしたものは一人としていないという。

「はあーはあ……もう、すぐ……！」

家の屋根の瓦を13ほど砕いた辺りでようやく集英組が見えてきた。そろそろ目について兄貴達にどやされない為にも一旦普通の道に降りて、そこから走り出そうと身だしなみを整えようとした時。

「わあああつー！」

「ん?!」

「ご、ごめんなさああい!!」

「お、おとおお……!!」

「小野寺小咲に宮本るり?…まさか!

——坊ちやああんつ!!」

着地し容姿を整えようとした時、目の前から可憐な少女とその華奢な腕に引きずられながらも1人地味目の少女が引きずられてきて、すぐさまどこかに連れていかれた。その様子から焦りに焦って整えた容姿など気にせず愛は走り出した

「はあ、はあ!坊ちやつ…!」

「なんや、大幹部様は偉い暇なんかのう…」

「なに、貴様ら猿が悪慈恵を働かせていないか気が気でなくてな…」

「ああん!お、愛い!おめーもこい!この礼儀知らずのよそもんにヤクザの恐ろしさ、思い知らせたれや!」

「口だけは達者だな…極東の猿があ!」

「わあああつ!ストップ、ストップ!!」

こうして、愛の長くは疲労感満載の一日は幕を閉じた。

「桐崎のお嬢様…自分に…！パソコンを教えてください！」

この後、なぜか火花を散らしているはずの敵方の心臓とも呼べる御方に弟子入りしたのは誰も知らない。

「誠士郎…準備はいいか？」

「はい、いつでも…」

この後、奇跡の再開があることを誰も知らない。

オマケ！

「ダイバインスペンサー国善」

「アアっ！」

「1号」

「キイイイっ！」

「2号」

「アアアアっ！」

「3号」

「クロオポツポオ！」

「ロドリゲス四世」

「オオツ！」

「クラツシャー加藤」

「コケエツ！」

「よし、みな元気か」

『○d5t?#llくっ!!!』

「愛さんって…ライオンにもお手させそうね」

「…違うない…」

ソウグウ

「わ、私…ずっと、一条くんのことっ…!」

「小野、寺…」

「?!」

プール事件から数日が経過した頃。

夕暮れ時の教室、そんなロマン溢れるシチュエーションに男女が二人きり。当然ながら告白する、される、かもしれないと思うだろう。だが、そんな所に空気もよまず1球の野球ボールが窓ガラスを割り飛び込んでくる。

雰囲気は一気に崩れ落ち、すぐさま2人は現実へと引き戻された。野球部達の声が聞こえてくると同時にそれまでの一連を聞き耳立てていた人物が1人。

（親父はああ言っていたが…やはり、露呈してやがる…先の宮本君の反応からするに…千棘お嬢様か洩らしたか? まあ、坊ちゃんも舞子殿には伝えたと言っていただけに、

責めようもない……だが……)

「その伝えた相手が、まさか両片想いとはな……」

「あつぶねーな！ 気をつけろよ!!」

「!」

(報告は……必要ないか……それより、気がかりなのは……)

坊ちゃんが教室から出ようとした動きがあつたためすぐさま身を隠し、愛は懐からあ
る一枚の紙切れを取り出す。

そこにはある一人の少女の写真と個人情報情報が纏められていた。近々転校生が来るら
しいのだが、色々と訳ありらしく男子の制服を着て、それも性別は女でありながら男の
ような名前。何よりも……

「鶴誠士郎……か」

(他人の空似、ならいいんだがな……)

愛の苦悩も虚しく、事件はもうすぐ勃発する。

(……似てやがるな……)

「初めまして、鵜誠士郎と申します。どうぞよろしく」

『おおおおおっ!!!』

「イケメン！」

「顔ちっさあー！」

「超美男子！」

「愛先生とは違うタイプ来たアア！」

「男なのに何で興奮してんだろ……」

「男なのに何で鼻血出てんだろ……」

案の定教室はお祭り騒ぎ、変なコメントも多々ある上に約一名怪訝な顔で転校生を見ているメガネ男子がいるがそんな事も気にしない。転校生は言われるがままに空いている席へと移動していった。そんな矢先、より一層クラスを騒がせることが起こる。

「鵜いつ!?!」

「お久しぶりです！お嬢!!」

『きやあああ!!!』

「ば、バカ! 何やってのよみんなの前で!」

(やっばりか…)

「心が洗われる…」

「イケメンなのに、ちつとも憎くない…」

「一条とは大違いだ…」

(あの眼鏡の野郎…まさか、こんなにも大胆に送り込むたあ…護衛、だけなわきやね…
…間違いなく近辺での調査兼監視か…)

あと最後の一言言った奴は…大山か、内申下げる。

「愛先生く職員室戻りますよ」

「へ、ん、っん…はい。」

(…いくらギャングとは言え今は生徒…どうしようもね…)

ただただ悩むしかできない愛はキョーコ先生に言われるがまま教室を後にした。しかし、頭を悩めていても時間は過ぎ去る。それはいつの間にか巻き起こっていた。

「何者だ……」

「何者も何も……俺あ教師だ。」

「我々の会話を気配を完全に消して聞き耳立てられる教員がどこにいる？ 一条愛、と言ったな……運のいい男だ。貴様はクロード様から殺すなと仰せつかっている。」

「そいつはありがてー話だ……俺も女子供相手に手え出す気はねーからな……」

「！」

「気の早いお嬢さんじゃねーか……」

「っ！……ちい！」

屋上を出てすぐの階段。その中間地点で2人は会話をしていた。何でもこのお嬢さんは俺の素性は愚か、あの眼鏡との因縁まで聞かされているらしい。軽く煽っただけで、このザマだ。

鵜はすぐさま懐からピストルを抜き出し先程、坊ちゃんにやったように銃口を向けようとするが、愛とてギャングの端くれ。それを片手で押さえつけ、もう方用の手を逆に関節を決め返した。鵜は舌打ちとともに自力で脱出し距離をとる。

「クロード様の言った通り気に食わん奴だ…敵であるはずの私を見ながら…その悲しげな目は何だ？その辛そうな態度は何だ…！まるで…！」

「…まるで…なんだってんだ？」

「！口が過ぎたな…失礼する…」

（ああ…やっぱりそうか…）

「おめーさんが…あの子何だな…」

気づいてしまった。あの少女こそ自分が置いてきてしまったあの子だと。そして、隠し通さねばならなくなった。知られる訳にはいかなかった。愛の苦悩はここにまた一つ増えていく。

「愛さん！」

「千棘お嬢様。それに坊ちゃんまでどうしたんですかい？」

「あ、愛兄い〜」

「聞いてよ愛さん！このアホもやしつたら！」

「はあ?!じゃあお前は組織ひとつ潰すような人間兵器相手に一般人が勝てると思ってるのかあ!?!」

「なあーにが一般人よ！もやしはもやしでもヤクザの2代目（笑）なんでしょ！」

「（笑）って何だよ！そんなのになつたつもりも、なる予定もねーよ！」

「お二人共……ここは学校です。誰に聞かれてるか分かりやせん。どうか慎んでください……」

「うつ……はい……」

それぞれ問題を抱えながら時間は過ぎ去っていく。あれから鐘が何度なつただろうか。その時は来るべくして訪れた。

「チャカカの音……？」

（それも……全部アメリカ式の連射型……加えてこの煙の臭い……）

すぐさま職員室を抜け出し、その発生源であろう方向へと向かう。その途中外を見てみると何やら人だかりが出来ていた。そこに目をやるとホワイトボードにデカデカと張り出された盆（ばくち、賭け事）もどきの後。愛の頭は直ぐにフル回転し、匂いを嗅

ぎ分け坊ちゃんを辿った。

「!」

「頭、冷やして貰うぜ」

「ぼ、坊ちゃああああん!?!」

なんとあろう事か3階に到着した愛の目の前で坊ちゃんこと一条楽とそれを追いかけていたであろう鶴誠士郎が窓からプールへと一直線にダイブ。沸き上がる生徒達とは裏腹に愛の顔面は蒼白。

愛も飛び込もうとは思ったものの、ここで愛も飛び込めば教員人生に一気に傷がつく。冷静になりつつも体だけはかなり暑くなり、人目につかない裏庭へと3階の窓から飛び降り、最短ルートでプールへと走り出した。

(間に合…)

「何やってんのよ、このブタ虫があッ!!」

「のおおおおっ?!?!」

「…坊ちゃん…」

天高く舞い上がる坊ちゃんの体。察するところ千棘お嬢様のアツパーが綺麗に決まり飛び上がっているに違いない。その光景に愛は膝をつき涙を流した。ここからは坊ちゃんの兄としてでは無く、教師としての仕事。乱れたスーツを整え、愛はその輪へと踏み入る。

「愛先生〜」

「一条先生じゃん」

「ん？どしたの？愛兄…むぐっ?!」

「舞子ど…舞子君。学校では先生と呼ぶように。それから全員解散。関係者だけ残つてね」

「ちえ〜」

「舞子君悪いんだけど坊ち…一条君を起こしたら第二準備室に来るように言ってもらえるかい？」

「へーい」

一旦、素で話のできる人物だけ残すべく生徒達を解散させる。坊ちゃんは気絶中で、

ジャージを着た鶴誠士郎とその主千棘お嬢様だけが残る。

「あ、あの愛、先生？実は…」

「痴話喧嘩も程々にして下さいね」

《事情は分かかってやす…》

《そう？勝手なこととしておいて何だけど、後は任せちゃってもいい？》

《ええ、ご安心を》

「…行く、鶴」

「お嬢、少しだけ時間を…」

「へ？」

「一条愛。私はあの男を認めていない。今回の戦いはあの男がお嬢を守るだけの力を示せるかどうかだ…こんなものは無効だ。だが、及第点…今回は貴様諸共見逃してやる」

「そいつあ…ありがとうー——ことですね…」

「っ！行きましょう…お嬢…」

「うえっ?!ちよっ、鶴〜！」

「…嫌われたもんだ…」

目線の会話を終え、千棘お嬢様が鶴誠士郎の手を取りその場から離脱しようとする。だが、あろう事か鶴誠士郎はそれを払い除け、一瞥した後に向き直り、こちらを見る。何でも、勝負の趣旨はそういうことらしい。なんとか今回はこの子に届くものがあったらしく、終わりを迎えるようだ。だが、その帰り際またしても鶴誠士郎は不機嫌そうな顔をうかべる。どうやら彼女は愛の見せる表情が気に入らないようだ。

「愛兄ちゃん！楽のやつ起きたぜ〜」

「お手数をお掛けしやした〜」

「いいってことよく着替えたらすぐ行くって」

「へい。では、自分も今から〜」

「愛兄ちゃん…内申は？」

「ヤクザ相手に商売するもんじゃありませんよ」

「につししく〜！」

「そのうち、掛け合つときやす」

愛もまた舞子集と別れ、坊ちゃんの待つ第二準備室に足を運んだ。荒事は一旦終わり

を迎えた。

「似ていた…」

鵜誠士郎はこちらに來た際に用意されていた部屋のベットのの上に大の字になっていた。時刻は既に深夜を回っている。今日は様々なことがあり、疲労から直ぐにでも眠れると思っていたのだが、気がかりなことが一つだけあった。

「一条愛…」

（もし、あの人が生きていて、成長していたとすれば…あんなふうになっているのかもな…）

「バカバカしいな…そんなことあるはずがない…ああ…本当に…」

（悪い夢だ）

少女はそのまま眠りについた。その日ある夢を見たのだと言う。自分を救った少年

がギャングの敷居をまたいで自分を置き去りにした夢。額に傷が入っており、やせ細っていつも悲しそうな目で自分を見つめていた。そんな少年の夢を見たようだ。

「なあ、愛兄」

「なんですかい？」

「さつきから何してんだ？」

「失礼ながら生徒に配るプリントの作成をしております。」

「へえくなあ愛兄……」

「へい」

「俺、これで反省文の原稿2枚目終わったんだけど……まだ文章の打ち込み終わんないのか？」

「……へい……！」

「……手伝ってやろうか？」

「！……へい……！」

こうして、波乱に満ちた長い長い一日は幕を閉じた。物語はまだ始まったばかり。

後日談

女子用の制服に着替えた鶴誠士郎の姿を見た男子生徒諸々は膝を着きながら涙を流し崇め、称えたらしい。

オマケ

プールの回《練習編》

「愛先生は泳がないんですか？」

「ええ、私はあくまで、万が一の時のための保険ですから…それより小野寺さん。坊ち、一条君に泳ぎを教えて貰ってはいかがですか？」

「ええええっ?!」

「…何で、愛さん泳がないわけ？」

「あー、何でってそりゃ…」

「愛兄ちゃん、脱いだらすごいからな」

「あー彫り物ね…」

「ああ、そういうこと。」

「俺は好きだけどなく愛兄ちゃんの刺青くなんだつたら俺も…」

「やめとけやめとけ…愛兄の前でそれ言ったら軽く1時間は説教食らうからな…」

「冗談だよ楽しくくれぐれも愛兄ちゃんには告げ口しないでね」

「大変ね、アンタも…」

「まあ、今更だろ…」